（別紙様式）　　（Ａ３判横）

令 和 ６ 年 度　学 校 自 己 評 価 シ ス テ ム シ ー ト （ 県立特別支援学校坂戸ろう学園 ）

目指す学校像	多様な社会の中でたくましく生きるための力を育む、地域から信頼される学校

重　点　目　標	1　幼児児童生徒が主体的・対話的に学ぶ力を身に付け、自己肯定感の醸成につながる授業実践を積み上げる。 2　坂戸市障害者福祉課及び自治会等と共に、ろう・難聴理解、手話の普及啓発活動を行い、地域とのつながりをより一層深める。 3　学部・分掌部会の業務改善に取り組み、働き方改革（月45時間・年360時間以内）の目標を達成する。

※　重点目標は３つ以上の設定も可。重点目標に対応した評価項目（年度達成目標を意味する。）は複数設定可。
※　番号欄は重点目標の番号と対応させる。評価項目に対応した「具体的方策、方策の評価指標」を設定。

達成度		
	A	ほぼ達成（８割以上）
	B	概ね達成（６割以上）
	C	変化の兆し（４割以上）
	D	不十分（４割未満）

1　授業改善
2　開かれた学校づくり
3　働き方改革

※　デフフッド：ろう者になるための探求課程を意味する概念

※学校関係者評価実施日とは、最終回の学校評価懇話会を開催し、学校自己評価を踏まえて評価を受けた日とする。

出席者　学校関係者　６名
　　生徒　４名
　　事務局(教職員)　１２名

学　校　自　己　評　価								学　校　関　係　者　評　価
年　度　目　標					年 度 評 価 （ 2月1日 現在 ）			実 施 日　令和7年2月１４日
番号	現状と課題	評価項目	具体的方策	方策の評価指標	評価項目の達成状況	達成度	次年度への課題と改善策	学校関係者からの意見・要望・評価等
1	・幼児児童生徒の実態に応じた思考力の達成状況の評価や学びに対する主体性の引き出し方について検討が必要である。 ・外部講師や他校とのオンライン交流授業を実施し、学びの意欲につなげていくことも検討していく。 ・他校の授業を見学する機会が激減しているため、教職員が学び合う研修体制を再構築する必要がある。 ・全日本聾教育研究大会東京大会に積極的に参加し、専門性を高める研修につなげていく。	①主体的・対話的に学ぶ力の育成及び自己肯定感の醸成を目指した取組	①デフフッドの視点を取り入れた授業づくりの実践事例集を作成する。 ①「自分を見つめる」「セルフアドボカシー」を取り上げた教育活動を実施する（学級活動、自立活動、文化祭の発表、スピーチ発表、生徒会活動）。	①専門性向上研修や新転任者研修資料に活用できるデフフッド指導事例集が作成できたか。 ①自己肯定感の醸成につながる授業を展開できたか。	①デフフッドの視点を取り入れた授業づくりに関する資料を校内ポータルにより全職員に周知した。また、乳相・中・高等部においてデフフッド指導事例集を作成した。 ①各学部における研究紀要をまとめ、学校HPにより公開する。	A	・引き続き主体的・対話的に学ぶ力の育成及び自己肯定感の醸成を目指した教育活動に取り組む。 ・本年度作成した実践事例集、デフフットの視点を取り入れた授業づくりに関する資料を活用する。	・幼児児童生徒一人一人が活躍する場を設け、それぞれの場で活躍できている。デフフッドの視点は大切である。それが保護者にも伝わるとよい。同世代との交流も継続して行ってほしい。
		②聴覚障害教育の専門性維持向上の取組	②全日本聾教育研究大会東京大会に積極的に参加し、東京都立ろう学校の授業実践の見学や他校の情報を入手する。 ②専門性の維持継承、他校との比較等、校内授業研究・研究協議を活用して本校の良さを確認する。	②全日本聾教育研究大会東京大会に積極的に参加し、他都道府県の情報や指導実践を研修できたか。 ②デフフッドの視点、主体的・対話的に学ぶ力、自己肯定感の醸成を校内授業研究・研究協議において取り上げ研究研修を実施できたか。	②全日本聾教育研究大会東京大会(10/17)に６９人の教員が参加した。東京都立ろう学校の授業実践についてZoomチャットにより全校で情報交換及び各学部の研究会で成果の確認をした。 ②教職員手話学習会を11回開催し、手話文法、表現方法、手話通訳の技術等、手話力の向上ができた。	A	・全日本聾教育研究大会東京大会において入手した他校の授業実践や情報を本校における教育活動に活かす。 ・来年度においても全国や他県、他校の動向に注視するとともに、各自の手話力の向上に取り組み、専門性の維持継承、指導力の向上を目指す。	・全国レベルの研修大会にほとんどの教員が参加することはなかなかできないことだと思う。本年度、全日本聾教育研究大会東京大会に６９人の教員が参加したことは素晴らしい取組であった。教員の手話技術の向上が児童生徒の指導のためだけでなく、教員の喜びに結びついていってほしい。
2	・昨年度の実績をもとに、坂戸市障害者福祉課や企業と共同でイベント等に取り組む計画が進行中である。地域のイベントに参加する場合、担当学部や部署を分散化し、計画的に実施する必要がある。 ・地域に根差した、地域と共に歩むろう学園を目指し、学校だよりやホームページを通して積極的に発信していく。	①坂戸市障害者福祉課、自治会との手話普及啓発活動の実施	①坂戸市障害者福祉課との共同事業を推進する（電話リレーサービス講習会、手話言語の普及啓発事業、手話言語の小中学生への普及及び交流）。 ①自治会との交流を積極的に深める（会場提供、夏祭りへの参加）。	①地域関係機関と連携し、電話リレーサービス説明会、ブルーライトアップイベント、坂戸市小学生への手話の普及、第一住宅坂戸団地夏祭りにおいて手話理解啓発活動が実施できたか。	①坂戸市障害者福祉課と共同事業として、電話リレーサービス講習会（６月）、ブルーライトアップイベント（９月）を実施した。坂戸市立小学校２校において出前授業を実施した。 ①第一住宅坂戸団地夏祭り（７月、寄）、坂戸市福祉であいの広場（１１月、小）、みんな幸せ共生社会県民のつどい（１２月、寄）、に参加し地域に根ざした活動を実施した。	A	・坂戸市障害者福祉課、近隣の小中学校、高等学校との連携、自治会との交流等をとおして、地域に根ざした手話普及啓発活動を実施する。 ・児童生徒数の減少を考慮し、活動内容や活動形態の見直しを行い、無理のない活動計画を作成する。	・今まで、地域との連携について坂戸市や自治会から参加依頼をしてきた。これからは学校が地域に貢献するという考え方ではなく、学校も行政も地域もお互い様という意識が大切だと思う。例えば学校行事の際に地域の人たちが手伝う等、学校と地域の連携の方法について考えてもよい。この地域ではろう学園が避難場所に指定されている。地域としても学校に協力したい。
		②企業と連携した共生社会への取組	②ウエルシア薬局と連携し、聴覚障害者に配慮した店舗の工夫等、ユニバーサルデザインへの取組を行う。 ②中学部職場体験を新規開拓、実施する。（対象：中２、２日間）	②ウエルシア地域包括推進部と連携しユニバーサルデザインの視点での教育活動が実施できたか。 ②生徒の実態に応じた中学部職場体験を実施できたか。	②地域包括支援センター主催オレンジカフェ（６月、ウエルシア薬局）、コエドテラス手話カフェ（８月、埼玉りそな銀行）に参加し教育活動の場を開拓した。 ②中学部社会体験学習としてウエルシア薬局で２日間の職場体験を初めて実施した。	A	・引き続き企業と連携した共生社会の実現に向けた活動に取り組む。 ・学校ホームページ、学校だより及びＳＮＳ等を活用し、児童生徒の目線から学校の活動、魅力について情報発信を行う。	・本年度、企業と学校とが連携した取組を多く行うことができた。中学部社会体験学習を薬局で行う等、初の取組もあった。本年度の活動を参考に生徒の実態に合わせた無理がなくメリハリのある活動計画ができるとよい。自治会への学校だよりの配付、生徒会のSNSの発信等、情報の発信が楽しみである。
3	・働き方改革基本方針に基づき、抜本的な業務削減と優先順位を付けた業務の遂行を実施する必要がある。 ・学部、分掌部会、委員会、各個人単位で明確な目標を示し、達成可能な目標から取り組んでいく。 ・教職員不祥事根絶のため、職員ミニ研修を実施し、未然防止を重視する。	①業務改善（業務の効率化・削減内容）の評価・反省と時間外在校時間月45時間以内で収めるための工夫	①学部・分掌部会において業務改善の目標を掲げ、取組の評価を実施する（12月）。 ①校務支援システム及びDocuWorks導入時の援助体制を構築する（9月）。 ①各職員自己評価シートに働き方改革の目標を設定し、計画的に取り組む。	①学部、分掌部会、委員会等において優先順位を付けた業務削減を検討し、達成度（○△×）を見える化できたか。 ①各職員の自己評価シートで目標を明確に示し、無理のない計画の下達成できたか。	①資料の事前配布、業務一覧の作成、Zoomチャットの活用、DocuWorksの導入等により作業の効率化を行った。 ①各職員の自己評価シートを元に面談を行い目標の明確化を行った。	B	・情報機器を活用し、業務の簡略化、効率化を進め業務改善を行う。 ・学部、分掌部会及び各職員の目標設定を明確化し、働き方改革を推進する。 ・教員の校内滞在時間は昨年度よりは改善されているが、さらなる改善に取り組み教職員の心と体の健康維持を推進する。	・働き方改革について教員の超過勤務が深刻であると聞いている。本校は準ずる教育を行っている学校であり教科の指導には準備を要する。来年度も校舎の大規模改修工事が予定されている。校舎の使用に制限が生じることもあり、さらなる業務の簡略化、効率化を進めてほしい。
		②風通しの良い職場環境と不祥事事故の根絶	②各職員室、学部間のコミュニケーションを円滑に行い、情報共有、共通理解を促進する。 ②不祥事防止のためのミニ研修を実施し、未然防止を強化する。	②教職員ポータル、Zoomチャットを活用し、漏れのないコミュニケーションを図り、情報共有、共通理解が達成できたか。 ②職員会議終了後のミニ研修を実施し、不祥事根絶を達成できたか。	②Zoomチャットを活用し、全職員への連絡、情報共有、共通理解が整備された。 ②職員会議終了後の時間を活用しミニ研修を５回実施した。管理職を含め、職員間で相談しやすい職場環境づくりを行った。年間をとおして不祥事は発生していない。	A	・情報共有システムの移行（ZoomからTeamsへ）をスムーズに行い、作業の遅滞を生じさせない。また、新システムの機能を活用し円滑なコミュニケーションを確立する。 ・ミニ研修等の実施をとおして、職員全員が不祥事根絶の意識を高く保ち、不祥事を発生させない職場環境づくりを行う。	・業務の簡略化、効率化に情報機器の利用、新システムの導入は欠かせない。全職員が共通理解のもとで運用できる環境を整えたい。 ・不祥事根絶に向けて風通しの良い職場環境づくりと意識の醸成に取り組んでほしい。